

日本語文法研究史概説

津坂朋宏

東京福祉大学 留学生日本語別科 (名古屋キャンパス)

〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内2-16-29

(2022年10月31日受付、2023年2月2日受理)

抄録：本稿は日本語の文法研究の変遷を時系列に並べて系統ごとに整理し、「文とは何か」という問いの答えを見出そうとするものである。近代以降、国語学の四大文法が結実し、そのうち橋本文法は国語教育における学校文法の基礎となった。また、山田文法の陳述論は時枝文法、渡辺実の研究へと発展し、南不二男による階層構造の研究に至る。それに対して三上章は日本語の文を事柄である「コト」が言語主体の態度である「サマ」に包含されたものと定義した。日本語学の文法研究の主流は三上の文法観を受けた寺村秀夫から益岡隆志や仁田義雄らを代表とする命題とモダリティという文法観に至る。階層構造研究と命題・モダリティ研究は共に文の成分が階層を成していると考えられるが、その階層の分け方に異なりがある。前者は「文とは何か」を「主語－述語」の主述関係で捉えているが、後者は「主題－述語」の題述関係で捉えており、主語の扱い方の違いがその背景にある。

(別刷請求先：津坂朋宏)

キーワード：文法研究の通時的解説、文の定義、主語－述語、主題－述語

緒言

本稿は「文とは何か」という問いの答えを文法研究史から見出すため、その通時的解説を試みるものである。本稿で言う「文法」とは語の並びにおける一つ一つの現象を調査した記述文法のことではなく、「語が文を構成する上での法則」といった広義のものであり、「文のあり方・捉え方」といったことを「文法観」と呼んでいる。

本稿の構成は次のようになっている。次章「解説の対象」では主だった参考文献を紹介する。第三章「解説」では初めに「3-1. 近代文法の始まり」で近代以降の文法研究の原点である大槻文法と山田文法について解説する。「3-2. 文構造研究への転機」では文構造を語の連続から階層的に捉えようとする転換点として橋本文法の文節と時枝文法の入子型構文論を解説する。「3-3. 階層構造研究」では時枝文法以降、文の階層構造研究がどのように発展してきたのか渡辺実と南不二男の研究を通して解説する。「3-4. 命題・モダリティ研究」では伝統的な研究の流れとは異なるものとして文構造をコト(命題)とサマ(ムード、モダリティ)で捉える研究について解説する。「3-5. 階層構造研究と命題・モダリティ研究の相違点」では階層構造研究と命題・モダリティ研究の相違点について解説し、その原因が日本語の文を「主語－述語」の主述関係と「主題－述語」の題述関係で捉える文法観の違いに起因することを述べる。最後に本稿の「まとめ」を記す。

解説の対象

本稿に記す日本語文法研究史は筆者がそれぞれ文献に当たり、時系列で捉えたものである。具体的には大槻(1889、1897)、山田(1950)、橋本(1948)、時枝(1941)、渡辺(1996)、南(1993)、三上(1959)、寺村(1982)、益岡(1987)、仁田(1997)、日本語記述文法研究会(2003、2009)を参考にして文法研究の流れを追っている。国語学の四大文法には山田文法、松下文法、橋本文法、時枝文法が含まれるが、本稿では主述関係の系統にあるものとして山田文法、橋本文法、時枝文法に触れる。また、文法研究史全体を見通す通時的視点として金水(1997)、浅川・竹部(2014)、仁田(2021)や、それぞれ個々の研究書の中で先行研究として説明されたものを参考にする。

解説

3-1. 近代文法の始まり

明治時代になって日本は西洋の学問を取り入れるようになった。そして、近代国家の仲間入りを果たすために国にある言葉が説明できる辞典の作成が必要となった。辞典には辞典に載っている言葉の使い方である品詞の並べ方、つまり文法の説明も必要だった。

具体的に日本古来の文法と西洋の言語学から取り入れ

た文法を合わせて体现されたのが大槻文彦の「語法指南」だと言われている。国学者の大槻文彦が文部省から編纂を任されて作成した国語辞典が『言海』(1889-1891)であり、その中で語をどのように並べるかを説明するために巻頭に記されたのが「語法指南」であった。「語法指南」は教科書としても使われ、学校の文法教育や国語学における文法研究に影響を与えた。

山田文法は国語学における四大文法の一つであり、その中で最も早いものである。そのため後に続く文法研究者に影響を与えている。

大槻文彦(1847-1928)

大槻文法は国語学における文法研究の始まりに位置し、その品詞分類は後に続く文法研究の基礎となっている。品詞分類が定まることによって主語、述語、修飾語といった語の機能による分類が可能になる。

大槻文法は「語法指南」を改訂増補した『広日本文典』(東京築地活版製造所, 1897)にまとめられている。その中の「文章篇」にて以下の「文とは主語と述語を備えたもの」と読める記述がされている。なお、旧字体や変体仮名、カタカナは筆者が現代の字体に修正している。

人の思想の上に、先づ、主として浮ぶ事物ありて、次に、これに伴ふは、其事物の動作、作用、形状、性質、等なり。「花、咲く。」「志、堅し。」などいふに、「花、」又は「志」は、先づ、心に浮ぶ事物にて、次に、「咲く、」(或は、「落つ、」)などいひて、「花」の作用を述べ、又は、「堅し、」(或は、「薄し、」)などいひて、「志」の性質を述べ。「花、」又「志、」は、其作用を起し、又は、其性質を呈する主たる語なれば、主語 (又は文主 (ぶんしゅ)) と称し、「咲く、」又は、「堅し」は、其の主の作用性質、を説明する語なれば、説明語 と称す。(中略)主語、上に居り、説明語、下に居るを、正則とす。主語と説明語とを具したるは、文なり、文には、必ず、主語と説明語とあるを要す。(大槻, 1897, 251-252). 本文は縦書きで、二重下線は原文の文字右側。その例「花、咲く。」「志、堅し。」にはそれぞれ「主語」「説明語」という説明書きが添えられている。)

ここにある説明語とは述語のことであり、述語の種類によって主語に立つ名詞の動作、作用、形状、性質などを述べる。それは述語の品詞によって変わり、動詞であれば動作や作用を述べ、形容詞であれば形状や性質を述べる。名詞は助動詞を伴って述語となる。

山田孝雄(1875-1958)

山田(1950)は文を「統覚作用によつて統合せられた思想が言語といふ形式によつて表現せられたものをいふ(p.127)」と定義している。その統覚作用と陳述について次のように説明している。

抑(そもそも)も陳述をなすといふことは之を思想の方面からいへば、主位の観念と賓位の観念との二者の関係を明らかにするコトで、その主賓の二者が合一すべき関係にあるか、合一すべからぬ関係にあるかを決定する思想の作用を以て内面の要素として、それを言語の上に発したものである。(山田, 1950, 104)

山田の統覚作用とは「A=B」というような主位観念と賓位観念の同異を判断する話し手の精神作用のことである。主位観念は主語の名詞、賓位観念は述語の名詞、動詞、形容詞が当てはまる。統覚作用はその二つの観念を結ぶもので、二つの観念が合一するか合一しないかを述べるために述語に現れるのが陳述である。山田は名詞に後接する「なり」「たり」「である」「だ」「です」などを助動詞ではなく存在詞と呼び、存在詞を日本語の中で唯一陳述の機能のみを持つ語(Copula、繫辞)とした。それに対して、動詞や形容詞は陳述の機能をその活用の中に持っている。

3-2. 文構造研究への転機

ここでは四大文法の橋本文法と時枝文法を解説する。橋本進吉と時枝誠記は文構造を捉える研究を始めた。橋本は文と語の間に「文節」という単位を設けた。時枝は文を文節で平面的に切ることの問題を指摘し、文とはその構造が入子型になっているものと考えた。

橋本進吉(1882-1945)

大槻の「語法指南」は学校文法に大きな影響を与えたが、後に橋本の研究によって改められ、これが現代の学校文法の基礎となっている。特に文と語の間に位置する単位である橋本の「文節」は日本人に馴染みのあるものである。

文 > 文節 > 語

橋本(1948)は文についてまずその特徴を「音」から説明している。

- 一、文は音の連続である。
- 二、文の前後には必ず音の切れ目がある。
- 三、文の終には特殊の音調が加わる。(橋本, 1948, 4-5)

文節とは文の切れ目であるが、音の切れ目とするだけでは、例えば「桜の花が咲いた。」という文において「桜の / 花が / 咲いた」がそれぞれ等しく結び付いていることになる。この問題に対してただ順番に文節を結ぶのではなく、意味によって文節のまとまりを作る「連文節」という単位を立てた。「桜の / 花が / 咲いた」のうち「桜の花が」が連文節となり「桜の花が / 咲いた」と結び付いているとした。

時枝誠記(1900-1967)

文構造をただ平面的に切るのではなく、連文節を作ることによって文の成分の包含関係が捉えられるようになった。しかし、連文節によっても解決されない問題が残っていた。それは文節「桜の」は文節「花が」ではなく語の「花」を修飾して「桜の花」という単位を作っているという問題である。その問題を解決しようとしたのが時枝(1941)の入子型構文論である。

入子型構文論は日本語の文が詞、辞、句という単位によって入子型をしているという考えである。この詞とは名詞、動詞、形容詞といった自立語のことであり、辞とは助詞、助動詞といった付属語のことである。時枝は詞の成分を引き出しの函に見立て、辞の成分を函の取手に見立てた。そして、詞に辞が付いたものを句とし、句は詞と共にまた一つの大きな詞を作る。文は最終的に詞に付く辞によって閉じられる。この詞と辞による入子型構造によって階層的に日本語の文を捉えようとした。(図1)

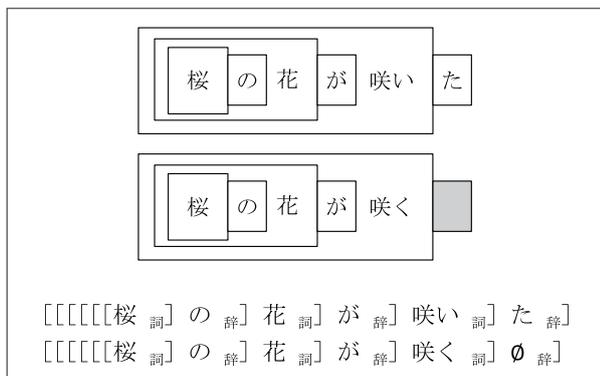


図1. 入子型構造

しかし、ここで問題となったのが「ゼロ辞」の問題である。「咲く」も詞であるため「桜の花が咲く。」には文全体を包む辞が存在しない。時枝は例文の「Ø」の箇所に「ゼロ辞」があると説明した。文末に限らず例えば「赤い花」と言った場合も詞「赤い」が辞を持たずに句となり詞「花」を修飾していることとなる。

また、文を言い終わっているのかいないのかという陳述に関する問題も生まれた。「桜の花が咲いた」は「桜の花が咲いた。」という言い切った文なのか、それとも「桜の花が咲いた(とき)」というように連体修飾するものなのかという問題である。

3-3. 階層構造研究

ここでは時枝の入子型構文論以降の文の階層構造研究を見る。渡辺実(1926-2019)は時枝文法における「言い切った文なのか、文ではなく連体修飾なのか」という述語の機能の問題に答えを出した。また、南不二男は述部の成分と述部以外の成分は階層に分類されると考えた。文の成分は四つの階層に分類され、文は包含関係にある成分の総体であるものと考えた。

渡辺実(1926-2019)

渡辺(1996)は時枝の問題に対する答えとして「叙述」と「陳述」の二種類を立てた。時枝の入子型構文論を取り入れつつ、文の切れる形、切れない形、そして文の成立に注目した。図2は渡辺が語の持つ構文的職能を示したものである。時枝文法で問題となった述部の機能を整理したのがこの内の「関係構成の職能」である。

語が持つ関係構成の職能のうち、叙述の「展叙」とは連用成分や連体成分が持つ職能のことである。連用成分には主語や目的語、副詞などの修飾語が含まれ、これらの展叙成分は述語に向かう。「統叙」とは述語が展叙成分を受けて意味のまとまりを作る職能のことである。述語の統叙によって意味のまとまりを作る話し手の表現行為が叙述であり、この叙述が先の「桜の花が咲いた(とき)」に当たる。それに対して陳述とは文として「桜の花が咲いた。」と言い切る職能のことである。

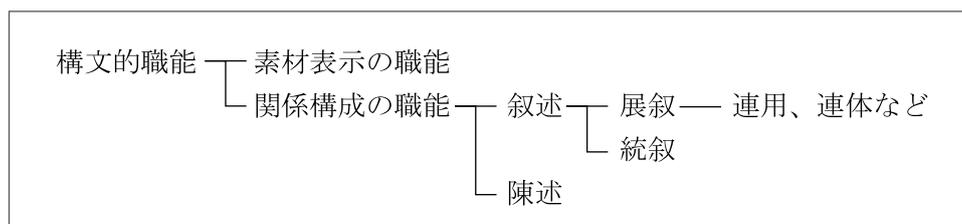


図2. 構文的職能の内部構造

(渡辺, 1996, 204. 図75を参考。原文は縦書き)

南不二男(1927-存命)

日本語では述部以外の成分を比較的自由に入れ替えることができる。しかし、「自然だと感じる語順」には傾向があり、南(1993)はその述部の成分と述部以外の成分による包含関係を階層にして示すことができると考えた。成分の性質によって文の階層は描叙段階、判断段階、提出段階、表出段階に分類されている。

描叙段階 素材である対象を描く段階
 判断段階 肯定・否定、過去認定、推量などを表す段階
 提出段階 感動、願望、意志などを表す段階
 表出段階 通達、命令、依頼などを表す段階

用例を用いて階層ごとの包含関係とそこに含まれる成分を示すと次のようになる。

[たぶん[きのう太郎が[花子にクレヨンを使わせ 描叙]なかった 判断]のだろう 提出]

ここで南の階層構造で注意すべきことが判断段階の主格「が」と描叙段階のヲ格、二格が異なる階層にあることである。ほかに「なあ」「おい」といった「呼びかけの成分」や、「な」「ね」といった述部における終助詞が表出段階の成分となる。文の成分はこの四つの階層に分類され、文とはその包含関係にある成分の総体であると考えた。

3-4. 命題・モダリティ研究

命題とモダリティについて日本語記述文法研究会編(2003)に次の記述がある。

文は、命題 (proposition) とモダリティ (modality) という2つの意味的な側面から成り立っている。この2つの側面は、コトとムード、言表事態と言表態度と呼ばれることもある。(日本語記述文法研究会編, 2003, 1)

南の階層構造と同様に現代の文法観における命題とモダリティも客観的事態を主観的態度が包含する関係で捉えている。三上章と寺村秀夫の文法観は、益岡隆志や仁田義雄といった研究に受け継がれる。その概観は仁田義雄とその弟子に当たる研究者による日本語記述文法研究会の『現代日本語文法』(くろしお出版, 2003-2010. 全7巻)にまとめられている(仁田, 2021, 218)。

三上章(1903-1971)

三上は、日本語は西洋の言葉のような「主語—述語」の主述関係ではなく「主題—述語」の題述関係にあると主張した。文には主題を有する有題文、主題を持たない無題文、そして主題が隠れた隠題文がある。

三上は主語と呼ばれてきたものを主格補語のガ格として対格補語のヲ格や与格補語のニ格と並べて補語の一つであるとした。また三上は、日本語の文は事柄である「コト」が言語主体の「サマ」に包含されたものであると考えた。例えば「このケーキは花子が作ったんだなあ。」という文は「花子がこのケーキを作った(こと)」というように人は文をコトの形で記憶すると考えた。そして、それを人に話す時は「このケーキは花子が作ったんだって。」というようにサマを伴って話す¹⁾。「象ノ鼻ハ、長イナア。」や「象ハ、鼻ガ長イナア。」からサマを取り除くと「象ノ鼻ガ長クアルコト」になり、「私ハ、彼女ノ結婚ノ仲人ヲシタダ。」は「私ガ彼女ノ結婚ノ仲人ヲシタコト」となる。これを話し手のニュアンスを取り除いた「経済的な記憶法」だと述べている(三上, 1959, 41-42)。

寺村秀夫(1928-1990)

三上がコトの類型として文の骨子に当たる部分を考えてのに対して、寺村(1982)はそこから派生したシンタクスのパターンをまとめた。それはどのような述語に対してどのような補語が必要なのかというコトにおける述語と必須補語の研究である。その述語と必須補語のパターンは日本語記述文法研究会編(2009)にも引き継がれている。

仁田(1993)の中に「寺村は、コトとムードとの関係において、テンスはムードの一つの形式であり、それに対して、アスペクトはコトに属する形式であるとするものの、述語の基本形と過去形との対立において、テンス・アスペクトの相互乗り入れが行われている、といった捉え方をしている(p.374)」という説明がある。このことから「～を～する」が「～が～である」というような格助詞が変化する範囲までをコトの範囲として捉えていることがわかる。ガ格、ヲ格、ニ格がコトに含まれている。

寺村は時枝の入子型構文論について係助詞の成分をコトの範囲にある成分と同じように入子型に含めたことに問題があったとした。山田が陳述に係る機能を係助詞で示していたことからその成分はほかの補語と異なる題目語(主題)として捉えるべきだと考え、文を三上と同様に題述関係で捉えている。

3-5. 階層構造研究と命題・モダリティ研究の相違点

三上から現代に繋がる命題とモダリティも南の研究と同じように階層を成している。しかし、三上や寺村の命題・モダリティの階層と南の階層構造はそのまま重なるものではない。その違いは日本語の主語をどのように扱うかに根ざしている。三上、寺村、そして益岡は主題になりやすいことを理由に「主格の優位性」を認めつつも、ガ格を主語ではなく主格補語、つまり補語の一つとし、述語に係る項の一つとして捉えている²⁾。それに対して南は主格「が」を描叙段階ではなく判断段階のものとしており、時や場所の修飾語と同じ階層に含んでいる。ガ格、ヲ格、ニ格といった必須補語を同じ階層の成分として捉える命題に対して、主格「が」をヲ格やニ格とは違う段階の成分としていることが命題・モダリティ研究と階層構造研究の相違点である。日本語の文は「主語－述語」の主述関係にあるのか「主題－述語」の題述関係にあるのかという文法観の違いがここに現れている。

まとめ

本稿では日本語の文法研究者が考えてきた「文とは何か」という問いの流れを追ってきた。明治時代に近代以前から国内にあった文法研究は西洋の言語学と混ざり合った。その時に生み出されたのが大槻文法であり、この頃から主語と述語という文法観ができていた。続く山田文法は文とは話し手によって主位観念と賓位観念の同異を判断したものであり、その話し手による精神作用を統覚作用と呼んだ。述語における統覚作用の現れが陳述であり、ここから陳述論が生まれた。橋本文法は文と語の間に音の切れ目である文節という単位を立て、文を文節の連なりとした。時枝文法は文を平面的な文節の連なりではなく、階層的な入子型をしているとした。渡辺実時は時枝文法で問題となった「言い切った文なのか、文ではなく連体修飾なのか」という陳述の問題を解決するために述語の機能を叙述（展叙・統叙）と陳述に整理した。南不二男は文の成分を性質の異なる四つの階層に分類し、文とは成分の包含関係の総体であるものとした。

主語と述語の関係で文を捉える文法観に対して、三上章は、日本語の文は事柄の「コト」が言語主体の態度「サマ」によって包含されたものという文法観を持っていた。三上のコトの類型は寺村秀夫によって述語と必須補語によるシンタクスパターンに整理された。寺村は係助詞「は」の成分をコトの範囲の成分と同じように含めてはいけないと考え、係助詞の成分をコトの範囲外にある主題として捉えるべきだと考えた。

階層構造研究と命題・モダリティ研究は文を同じく包含関係の構造で捉えつつ異なる点があった。主格「が」をヲ格やニ格と異なる階層に分類している階層構造研究に対して、命題・モダリティ研究は主題をコトに含まない代わりにガ格、ヲ格、ニ格を同じ補語として捉えている。これは主語をどのように扱うかという問題が背景にあり、日本語の文を「主語－述語」の主述関係で捉えるのか、「主題－述語」の題述関係で捉えるのかに起因している。

文法研究史を理解することは「文の定義」を考える資料となる。以上、日本語文法研究史の通時的解説を記した。

付記

本稿では引用も含めて字体や仮名遣いを現代のものに変更・統一しており、その間違いの責任はすべて筆者にある。本稿を書くきっかけを与えてくださった勉強仲間の皆様、ご指導を頂けた査読者の先生方、ありがとうございました。

注

- 1) 三上(1959)にはコト (Dictum) とサマ (Modus) をどの文献から参考しているのか書かれていない。しかし、寺村(1982)はコトを渡辺の叙述内容、シャルル・バイイの Dictum、フィルモアの Proposition とし、ムードを渡辺の陳述、シャルル・バイイの Modus、フィルモアの Modality だと説明している (p.51)。
- 2) ただし、仁田(1997)は「発話・伝達のモダリティによる人称の指定」と「主語の人称が述語の発話・モダリティを限定してかかる現象」を根拠に挙げて主語を積極的に認めている。

文献

- 浅川哲也・竹部歩美(2014): 歴史的变化から理解する現代日本語文法. おうふう, 東京.
- 橋本進吉(1948): 国語法研究. 岩波書店, 東京. (橋本進吉博士著作集刊行委員会(1948)『橋本進吉博士著作集第二冊 国語法研究』刊行).
- 金水 敏(1997): 4 国文法. In: 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏, 岩波講座 言語の科学5 文法. 岩波書店, 東京, pp.119-157.
- 益岡隆志(1987): 命題の文法－日本語文法序説. くろしお出版, 東京.
- 三上 章(1959): 構文の研究. 東洋大学, 東京. 博士論文. (三上 章(2002)『構文の研究』くろしお出版).

- 南不二男 (1993) : 現代日本語文法の輪郭. 大修館書店, 東京.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) : 現代日本語文法4 第8部 モダリティ. くろしお出版, 東京.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) : 現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス. くろしお出版, 東京.
- 仁田義雄 (1993) : 寺村秀夫の人と学問. In: 寺村秀夫, 寺村秀夫論文集Ⅱ—言語学・日本語教育編—. くろしお出版, 東京, pp.361-375.
- 仁田義雄 (1997) : 日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して. くろしお出版, 東京.
- 仁田義雄 (2021) : 国語問題と日本語文法研究史. ひつじ書房, 東京.
- 大槻文彦 (1889) : 語法指南. 勉誠社, 東京.
- 大槻文彦 (1897) : 広日本文典. 東京築地活版製造所, 東京. (勉誠社 (1980) 『広日本文典・同別記』復刊)
- 寺村秀夫 (1982) : 日本語のシンタクスと意味I. くろしお出版, 東京.
- 時枝誠記 (1941) : 国語学原論. 岩波書店, 東京. (岩波文庫 (2007) 『国語学原論 (上・下)』復刊)
- 山田孝雄 (1950) : 日本文法学要論. 角川書店, 東京. (書肆心水 (2009) 『山田国語学入門書1 日本文法学要論』復刊)
- 渡辺 実 (1996) : 日本語概説. 岩波書店, 東京.

History Overview of Japanese Grammar

Tomohiro TSUSAKA

Institute of the Japanese Language,
Tokyo University and Graduate School of Social Welfare
(Nagoya Campus)
2-16-29 Marunouchi, Naka-ku, Nagoya City, Aichi 460-0002, Japan

Abstract : This article explains a history overview of Japanese grammar from the perspective of a Japanese teacher. The purpose of this article is to explain and understand how Japanese researchers have built the view of Japanese grammar. The turning point of the history of Japanese grammar was the time when Japan opened the country in the Meiji period. Fumihiko ŌTSUKI organized Japanese grammar into the Japanese-Western compromise. After that, four famous grammar styles were created, and one of them, the HASHIMOTO grammar is now being used for the basis of grammar education. Furthermore, sentence definitions created in the YAMADA grammar were used to develop the TOKIEDA grammar, and also by Minoru WATANABE. Finally, it developed into the theory of predicate sentence structures by Fujio MINAMI. On the other hand, Akira MIKAMI considered Japanese structures not to be subject-predicate structures but structures of dictum and modus. In one of his significant works, he organized basic types of structure “koto”. Following MIKAMI’s theory, Hideo TERAMURA completed the basis of grammar for teaching Japanese as a foreign language. It covered widely used Japanese syntax, voice, aspect, tense, modality, complex sentences and so on. These propositions and modalities were inherited by Takashi MASUOKA and Yoshio NITTA famously. The difference between the traditional theory of predicate sentence structures and the structures of proposition and modality stems from the difference of view of grammar about “subject-predicate” or “topic-predicate” relationships.

(Reprint request should be sent to Tomohiro Tsusaka)

Key words : Diachronic explanation, Definitions of sentence, Subject-predicate, Topic-predicate

